

省察的授業計画の過程研究

—REX プログラム事前研修における『異文化適応』 『オーラルコミュニケーション入門』授業と研修修了生に対する インターネットカウンセリングの関連付けの試み—

宮城 徹

(2004. 10. 29 受)

【キーワード】 省察的授業研究、REX プログラム、異文化適応、オーラルコミュニケーション、インターネットカウンセリング

1. はじめに

当センターでは、1990年に文部省（現文部科学省）と自治省（現総務省）及び地方自治体の協力によって開始されたREXプログラム¹（旧称REX計画）の事前研修（以下REX研修と略す）を委託事業として行ってきた。その期間は毎年4月初旬から7月初旬であり、研修内容は、日本語基礎、日本語教授法、日本語教育実習、語学研修、文化・事情など多岐にわたっている²。筆者は2002、2003年度に『異文化適応1,2』（2コマ）を、2004年度に『異文化適応1,2』、『オーラルコミュニケーション入門1,2』（計4コマ）を担当した。また2002年度以降、赴任地で心理的ストレス、不安、不満などを抱える研修修了生に対し、インターネット（e-mail）を活用した遠隔地カウンセリングを実施してきている。その間の授業計画、授業に対する研修生の反応、それに対する筆者の内省、カウンセリングの経過、研修生からの授業評価、相談内容などは全て記録されてきている。本稿ではこれらの質的データをもとに、まず、研修生とのインターアクションの中で、筆者がいかに関係生に置かれた状況を分析し、その結果をどのように授業やその後の対応に反映させていったのかを記述、検証する。次にその授業結果をどう評価し、その後の授業の改善に

¹ 外国教育施設日本語指導教員派遣事業（Regional and Educational Exchanges for Mutual Understanding）の略。日本語教育を行っている海外の初等、中等教育機関に、日本の公立中、高等学校教員を現職のまま約2年間派遣している。

² REXプログラム関係文献は本センター『国際理解教育への展望 —REX 帰国教員のネットワーク構築へ向けて— シンポジウム2003 報告書』108-109 に一覧がある。

う役立てようとしたのかを「省察的」(リチャーズ/ロックハート 2000)に描写する。最後に今後の授業の方向性について検討することとする。

2. これまでの経緯

井上・鈴木(1994)や『センター活動記録』(1998-2003)などをみると、これまでこれに該当する授業は「異文化間コミュニケーション」、「異文化間カウンセリング」、「異文化適応」というタイトルで毎年2回(1回90分)行われてきていた。他にも「海外で安全に過ごすためには」「日米 Teaching Style 考」といった異文化理解関連授業があるが、別々の講師が独自に行っており、必ずしも一貫性のあるものとはなっていない。したがって、これまでの当該授業担当者も各々が、授業を充実させるために、短い担当時間の中にさまざまな工夫をしている。たとえば、井上・鈴木(前掲)は授業中に複数の体験学習を用意したり、希望者を対象に週末を利用して、体験学習を含む構造化されたエンカウンター・グループを実施して、効果をあげている。また2000-2001年度を担当した小松は異なる価値観に対する感受性を身につけ、異文化において生活したり働いたりするための知識と技能を伝授することに腐心している(当該年度『センター活動報告』による)。本授業を引き継いだ筆者もこれらを参考にして準備を始めた。

2-1 2002年度「異文化適応」授業

授業は全13週のうち、第7週と第9週に行なわれた。この時期というのは、研修後期の2週間は教育実習に、そして最後の1週はその反省や最後のまとめにあてられるため、いわゆる講義授業では、後半に位置している。「異文化適応」といった授業は後述するような内容の場合、研修の前半に実施するほうが自然であるが、研修前半にあたる4月は、新年度の学部進学留学生が当センターに到着し、学習を開始する時期である。筆者の属する留学生指導部が1年で最も多忙な時期でもあるということから、REXプログラム担当者の配慮でこの時期となっているのである。

授業を実施する際、一方的な講義形式を取るか、双方向的対話形式を取るか、多方向的グループ討議形式を取るかは悩むところである。この年の研修生の多くは教員経験10年以上で海外渡航経験もあること、人数は21名であること、赴任先はアメリカが多いが、7カ国と多様なこと、授業がわずか2回であることなどから、授業形態はグループ討議形式として、専門的な知識や特別な技能習得を目指すのではなく、彼らが自らの立ち位置を再確認する時間とすることにした。また2回の授業

を第1回は学校現場への適応、第2回を学校外での適応と分けて進めることにした。

授業に当たっては、いくつかの「仕掛け」を施した。コミュニケーションのおもしろさを感じてもらうために、まず最初に「先生の言うことを信じてはいけない」というパラドクスの指示を与えた³。また「あなたにぴったりと合った異文化適応のテキストブックはない」こと、「あなたの赴任地は、教科書を使うということが考えにくい環境かもしれない」ということを理解してもらい、マニュアル依存症からの脱却を目指して、あえて参考図書を設定しなかった。またこの年は筆者が始めて REX 授業を担当することになった年であったので、研修生の特質をこちらが学ぶ必要もあった。授業前に REX プログラム担当の教員から概要を聞くとともに、授業中にも直接研修生から話を聞くという方法を取ることにした。つまり通常事前に行うべきニーズアナリシスをあえて授業内に行ない、それ自体を授業内容として組み込んだ。授業の前半で彼らに OHP シートを配り、REX プログラムに参加した動機（理由）、目的（目標）などを箇条書きしてもらい、一人一人に発表してもらった⁴。表1はそれを簡単にまとめたものである。

表1：2002年度REX研修生参加の動機（21名、複数回答）

動機（理由）	
語学力、教師としての力量を磨く	17
新たな出会いを求める、視野を広げる	12
海外で暮らしたい	11
人生をリセットしたい、日本の教育現場を離れて、充電したい	10
海外で教えてみたい	8
上司に命令、勧められた	5
遊びたい、スポーツしたい、旅行したい	3
日本のことを世界に知らせたい	3
海外で学んだことを日本の現場に生かしたい	3

この結果を見たり、発表を聞いてみたりすると、彼らが複数の動機を持ち、各々微妙に違った意識を持って研修に臨んでいることが見えてきた。「人生をリセットし

³ 筆者の話をも信じてはいけないというメッセージであると共に、このメッセージ自体を疑ってかかれというメッセージともなっている。

⁴ 研修生によると、それまでの研修中（授業中、授業外を問わず）このような機会はなかったとのことであった。本心を伝え合う最初の機会のようであった。

たい」「遊びたい」といった一見逃避的ともうかがえる回答も、「このままでは自分を見失ってしまう」といった不安、「何とか教師としての情熱を持ち続けたい」という意欲が同時に存在していることがわかったので、筆者はあえてそのことを言語化して、研修生に返した。この授業が研修中期に行われ、既にある程度、研修生間にグループ意識が生まれていたこと、講師（筆者）が立場を逆にして「学校の現状を教えてほしい」と請うたことで、これ以後の授業でも研修生から「本音」と思われる言葉が次々と飛び出し、親和的な雰囲気の中で授業は進行した。研修生からも「このアクティビティ以降、グループの凝集性が高まったと思う」といった趣旨の感想が複数寄せられたのは、幸運であった。

次に研修生を4グループに分け、「異文化、特に学校現場においてどんな困難が起ころうと予想されるか」について OHP シートに箇条書きしてもらい、発表してもらった。それをまとめたのが表2である。

表2： 学校で予想される困難（4グループ、複数回答）

現地教員との人間関係、孤独感	4
コミュニケーション（言葉の問題）	3
生徒のコントロール	3
生徒の指導方法	3
生徒の日本語学習に対する意欲の低さ	2
現地教員との地位、権限の相違	2
教育設備の不足	2
習慣、マナーの違い	1
前任者、現地採用者と比較される	1
民族、人種の多様性の扱い	1
授業準備に手間取る	1
自分の力量不足	1
自分のやりたいことをやらせてもらえない	1
学校の食事が口に合わない	1

もちろん困難が自分にとって、どのような形で降りかかってくるかという現実味はないにせよ、研修生はこの段階で既に、赴任先学校でどんな困難が待ち構えているか認識しており、特に現地教員や生徒とのコミュニケーションに問題が生ずることを予測していることがこの結果からわかる。つまり研修生は、全くの白紙状態で

赴任地に向かうわけではなく、ある程度の心構え(readiness)は、できているのであり、この授業にはそれ以上の何か(情報なりスキルなり)を求めていると思われた。そこで筆者は、「具体的な対応は、ケースバイケースである」と伝えた上で、事例を交えて以下のようなアドバイスを与えた。

- (1) 困難を避けようとしてはいけない。全て順調な異文化体験は貴重な体験とならない。困難を乗り越えて人間は成長する。
- (2) 異文化体験の中から、その環境でもっとも適切な日本語教育の形が見えてくる。
- (3) あなた自身が異国の学習者として熱心な姿勢を示すことが、説得力を生む。
- (4) 自分の中のステレオタイプや偏見に気づく。正論とみえるものを疑ってみる。

こうした指摘が単なるお題目にならないように、具体例を沿えて話をした。また適応能力を高めるために以下のような指摘もおこなった。

- (5) 悩みを溜め込まずに、発散できるようにサポートネットワーク(日本人同士、ホスト国人、外国人同士)を形成する。そのためにインターネットを活用する。
- (6) 肉体的、精神的耐性を高めるために、心の拠り所となるものを見つけておく(人生哲学、宗教、身体的運動など)。

当初この授業の目的を「各人の立ち位置を確認」し、知識、技能の習得を目指すものではないとしたにもかかわらず、上記のようなアドバイスを伝えることにするまでには、講師(筆者)の心中ではそれなりの葛藤があった。それは「駆け出し教員のジレンマ」とも呼べるものである。つまり『自分は専門家なのであって、そうあることが学習者から期待されているのだから、そういう話をするべきだと考え、専門的知識、技術を詳しく正確に語ることで、「自分は良い授業をしている」という気になりがちだが、実は「それを聞いた学習者はわかった気になるだけで、身につけていない」のだから、それではいけないのだ⁵ということにも気づいている』教員の悩みである。

もっと具体的に、各国別にアドバイスを行うこともできた。たとえば赴任国の「一般的常識」(特に日本と異なる常識)を知識として与えることで、不安の軽減化

⁵ 大阪外国語大学奥西峻介教授は、日本語教師を目指す人たちに対して、「学習者に文法を教えても良いが、文法を語ってはならない。」と説いたことがあった。

(uncertainty reduction)をはかり、異文化間の移動を円滑におこなわせようとする学習理論を用いることも可能であった。しかし十分な説明をおこなう時間がなくて、単なる知識伝授重視となり、研修者に新たなステレオタイプを抱かせることになったり、知識優先、現実軽視の学習態度の形成、強化につながったりする恐れもあると判断して、これについては行わなかった。同様に、異文化間心理学のこれまでの重要知見についても、紹介しなかった。この点では、抑制の気持ちが勝ったのである。

次回の授業では、過程における異文化適応を扱うので、家族同伴の研修者は、同伴者の出席も歓迎することとした。筆者が想定していたよりはるかに時間が足りなかったが、研修生間の討議が熱心に行われた結果であったので、積極的に評価し、次回の授業の内容を見直すことにした。

第2回の授業では、二人の研修生の配偶者が参加した。最初に、最近の傾向として、さまざまな分野において、「多様性」が重視されているという事実を例を挙げて示した。合わせて、「ある結果は一つの原因に起因するとは限らない」ということを直線的因果律と円環的因果律（遊佐：1984）の例を挙げて説明し、異文化で起こりうる問題も、決して原因は一つではないし、原因を取り除かなくても、問題が解決することもあるといった理解を促した。そしてこの授業自体も、多様性を重視し、原因や対処法を限定せず、使いうる全ての方法を利用して、困難に立ち向かうという姿勢を強調することにした。異文化に「連れて行かれ」生活を強いられる配偶者や子供の異文化適応の問題をさまざまな事例を交え、研修生の体験も紹介してもらいながら、討議していった。最後に国際結婚についてのアドバイスも加えた。

2回の授業はあっという間に終わり、研修生による授業評価は好意的であったが、筆者としては伝えたいことが伝えきれなかったという不全感が残った。それは日本の教育のあり方、内容、教え方が厳しく問われ直されている現在において、ここにいる多くの研修生がこの異文化体験を人生の「転機」、「変革期」、「ターニングポイント」（いずれも彼らの表現）と考えているのだから、彼らにこそ、この問題に自分なりの解答を見出してもらいたいという期待があったからである。それを考えることは、斎藤（2001）が主張する、「（先生のいなく）あこがれに（生徒が）あこがれる関係（こそ授業の本質）」を生み出すことにもつながると思えたからである。しか

し与えられた時間があまりにも短く、これについては今後の課題とせざるを得なかった。

研修の最後には、何人かの研修生から、赴任時に不要になる家具や食器、自転車などをセンター留学生に譲ってもらう活動を開始した。そのやり取りの過程で、何人かの研修生とはよりつながりが深まることになった。この活動は現在まで毎年続いている。

2-2 2003年度『異文化適応』授業

授業は全13週のうち、第9週と第10週に行なわれた。この年は研修生(18名)と本研修に関心のある外部研究者が1名加わっていた。前年の経験から、最初の段階で、『異文化に立ち向かう人生を生き抜くのに必要な指針(人生哲学)をあなたは持っているか』という問いを発し、意識化を図ったが、具体的に討議するには至らなかった⁶。次にこちらから回答を与えるのではなく、研修生に考えてもらうために、異文化適応の必要条件をあげてもらい、それを黒板に書き、分類していった。ここで「個人の資質」、「ホスト環境」、「個人とホストの関係」など様々な要素が絡み合っていることを実感させた。そこで次に「国内での異文化体験」(たとえば勤務校の異動による人間関係の再構築など)について体験を話してもらい、そのときの解決法、失敗談について検討した。その後前年と同じ直線的・円環的因果律の説明をし、状況の多様性と可能な解決法の多様性を理解してもらうように努めた。また前年同様に応募の動機、目的を研修生全員に書いてもらい、お互いの立場を理解する活動をした。

前年の授業から、研修生の抱える異文化不適応は単純化してみると図1のようになると考えることができた。今回はこの図を示し(そのときは英語表記)、自分の夢(動機、目的)が実現できない状況を想像させて、その際の方策について、おぼろげながらも考えてもらう作業を最後に行った。

第2回授業では、二人の研修生が配偶者を伴って参加した。第1回授業の要点を

⁶ この本質的な問題については、前年に引き続き、ぜひ研修生と考えたいと思い、その後ニュースレターに寄せた小文で議論を促したが、誰からも反応はなく、行えなかった。各赴任地で非常に多忙な毎日を送っている研修生に、そんな議論を期待しても無駄だったのかもしれない。あるいはそのような問い自体歓迎されないものなのかもしれない。しかし後に述べるネットカウンセリングでは、これに関連した語りの対象者からよくなされることは重要な点だと筆者は考える。

確認するためとこの新しい参加者に流れを理解してもらうために、前回のおさらいとして、「直線的な因果関係理解をやめてみよう」、「期待と現実のギャップによっても不適応が起きる」という点を指摘した。次に様々な不適応症状を紹介し、それが固定化するいわゆる悪循環に陥って、自分では抜けられなくなる状態（引きこもりなど）について説明した。それにどう対処していくかについては、「自分あるいは自分の見方を変える」、「相手に働きかけて、相手の態度、相手の見方を変えさせる」、「相手との関係性を変える」、「環境に働きかけて、環境全体の自分に対する役割や認知を変えさせる」などといった方法を説明した。しかしこれは「言うは易し、行なうは難し」であることは明白であった。そこで「関係に巻き込まれている人（あなたや相手）だけではどうにもならないことも多い。助けを外に求めることは決して恥ずかしいことではない。」ということを読いた。

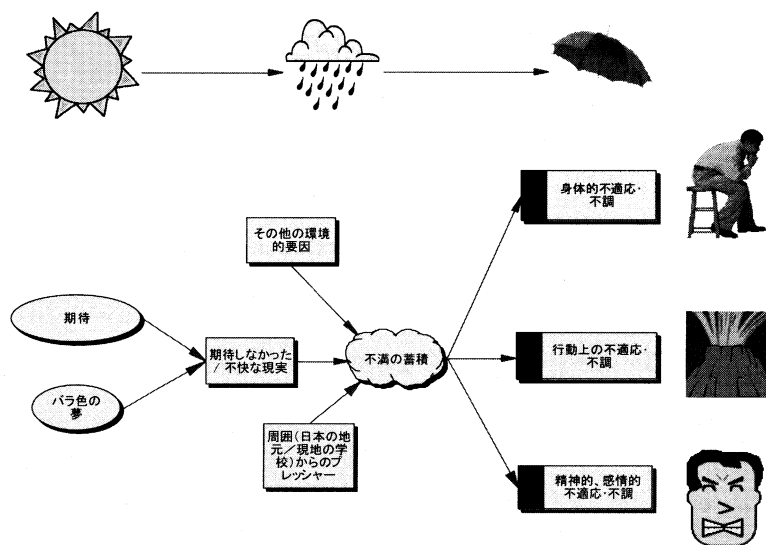


図1：単純化された「異文化に派遣される人々に見られる不適応の過程」

また筆者のこれまでの研究で明らかになっていた点、「その場から逃げ出すという最後の手段を心の中に用意していることは非常に大切である。契約破棄をして逃げ帰れば、信頼は一時的に失われるかもしれないが、命を失わずにすむ」ということを強調した。これは事前研修を実施する組織のメンバーとしては、表明することを

躊躇する内容だが、たいへん真面目で職務を完璧に遂行しようとする者が多い研修生には、心理臨床家としての立場から筆者はぜひ伝えておきたいと考えたのである⁷。

家庭においては、配偶者や子供たちの危急信号に気づき、真剣に向き合っていく姿勢の重要性を強調したが、独身の研修生も多く、必ずしも全員が興味のあるテーマではなかったので、あまり時間を裂くことはできなかった。最後にいわゆる「20問法」（「私は」で始まる短い文を短時間の間に20文作ってもらおう）をおこなった。これはこのアクティビティ自体が研修生に何らかの気づきを生むのではないかという期待と同時に、同じ作業を帰国後に再度実施し、その間の変化を自ら実感してもらう機会が将来あるかもしれない、それを研究に利用できるかもしれないという低レベルの下心からであった。

研修終了後におこなわれた研修生からのフィードバックは非常に好意的なものが多く（たとえば、「お互いの自己開示ができて楽しかった。」、「たいへん役に立った」、「結局なにをしても一緒なんだと思った。思い切り悩むぞー！と思って行こう。」等々）、筆者が安心したのは事実であった。しかし彼らが現実的に困難に直面したときにこそ、筆者を利用してもらうことはできないのだろうかという気持ちが強くなっていた。

2-3 e-mail を用いたカウンセリングの試み

筆者が e-mail を用いたカウンセリングのやり取りを開始したのは、1998 年頃である。当時海外に在住していた筆者のもとに、日本に住む旧友から個人的問題について「e-mail で相談したい」という問い合わせがあった。きちんとした契約関係の存在しない無料カウンセリング、その上面接を行わない筆談カウンセリングであり、まさに手探りであったが、その可能性を感じ、とにかく始めてみることにした。翌年には自らの居場所を求めて世界を放浪する 20 代の若者との e-mail カウンセリングが始まっていた。インターネット・セラピーを広く実践している田村（2003）が指摘するように、インターネットを用いた心理療法にはそれなりの制約や問題はあるものの、セラピストとの関係性がこれまでの心理療法とは異なるために、違った治療効果を生み出すことが、筆者にも感じられた。また 1 対 1 のセラピーではなく、「メイリングリスト」によるサポートグループ機能にも注目せざるを得なかった。

⁷ この点は、ネットカウンセリングを必要とするケースの場合、特に重要となる。

2003年になって、2002年度 REX 研修修了生の中にさまざまな問題が生じているということが、彼らの「メイリングリスト」から明らかになり、筆者にも伝わってきた。また彼らからの相談の依頼も直接舞い込むようになって来た。前述のように筆者は、事前研修のみの研修生との関係では不十分であると感じていたので、躊躇なく In-service supervision 的関わりとして REX 研修修了生に対して e-mail カウンセリング（このプログラムでは「ネットカウンセリング」と以後呼ばれるようになった）を行うことになった。

この段階では（そして現段階でも）「チャット」という形式や「インターネットテレビ電話」という形式での相談の事例はない。全てが e-mail による相談である。この方法が明らかにこれまでのカウンセリングと異なる主な点は、

- (1) 相手の顔や姿が見えないこと（非言語的情報が得られない。都合の良い時間帯に連絡できる。相談すると決めてしまえば、自己開示が比較的容易である。）
- (2) 通常のカウンセリングのような短い対話型で進行せず、むしろ新聞の悩み事相談のように「質問/描写」「回答/感想」といった具合に、一方がターンを長く取る。そのためカウンセラー側は、即答というより熟考した上で、返事を書くことになる。
- (3) このカウンセリングは来談という形ではなく、返事を書くかどうかによって、進行したり、終了したりする。

(4) 双方のやり取りは文章としてコンピュータ上に残る（単なる思い付きでは答えられない。個人情報の取り扱いの問題、第三者への転送、流出の問題をはらむ。）などである。もう少し具体的に記せば、たとえば (1) (2) に関して、通常のカウンセリングでは、相手の主張が理解できたかを調べるために、その場で確認を繰り返したり、相手の表情を読み取ったりすることができるが、ネットカウンセリングでは言語的情報に限られ、相手の理解度をその場で確認することはできない。筆者も自分の主張が相手にきちんと伝わるような文章表現になっているかはいつも不安を持っているので、場合によっては前回、前々回の文章を引用したり、修正したりして伝え直すようにしている。このように、歴史の浅いこの心理療法的活動は、筆者にとって新たな修行の場となっている。

さて、具体的な事例は、プライバシー保護の観点から、ここでは報告できないが、何人かの REX 研修修了生とのやり取りから、赴任期間が終わりに近づくにつれて、「思ったように語学力が向上しない」という悩みが語られることが多いことに気づいた。これは日本人に広く信じられている「半年もすれば現地の言葉が聞き取れる

ようになり、1年もすればネイティブスピーカーのように話せるようになる」というむしろ例外的な事例（「神話」）を彼ら（多くが英語教諭）が期待していたといえる。しかし本来修了生は、「日本語・文化を教える役割と赴任先言語・文化を学び、持ち帰る役割」双方を与えられている以上、狭義の「言語」教育及び習得にとらわれず、日本のコミュニケーション全般や様々な文化の側面について教え、赴任先のそれらについて学ぶということこそ、肝要なのではないだろうか。それこそ「教科書に載っていない、生の情報」の習得なのであり、両国の学習者が彼らから学ぶことを望んでいるものではないだろうか。この点をぜひ事前研修の段階で彼らに問い、伝えられないだろうか、と筆者は考えるに至った。

2-4 2004年度『オーラルコミュニケーション入門』授業

前述のようなネットカウンセリングの経験から、筆者は REX 担当部に新しい授業の提案をしたところ、幸いにもお認めいただいた。しかしその授業のタイトルと内容については、なかなか定まらなかった。なぜなら筆者の希望で始めることになったにもかかわらず、そこで行おうとしていることが、筆者の専門でなかったために、授業の内容とその方法が見えてこなかったのである。つまりそれまで筆者が研修生に投げかけてきた「何をどう教えるか」の問いが、皮肉にもブーメランのごとく筆者に帰ってきたのだった。

結局、内容的には、ネウストプニー（1982）のいう「文法外のコミュニケーション行動」や Beebe & Fanselow（1987）の主張する social rules of speaking といった社会言語学の一分野の視点の理解とともに、「話し言葉」をはじめとする現地の文化習慣を吸収するための切り口を、いくつかの事例を通して研修生に投げかけ、自らのアンテナを用意してもらおうということになった⁸。授業のタイトルは研修生の馴染みのあるものにしようということで『オーラルコミュニケーション入門』としたが、これは高校などで行なわれている同名の英語授業とはかなり異なるものであることを予測した上でのことである。

第1回の授業では、「話し言葉」の特徴について研修生から指摘してもらった。次にコミュニケーション能力とはどんな能力かを考えてもらいながら、話題を「文法

⁸ 先行研究をあたってみると、この分野の研究は、「話し言葉」の多様性が研究を難しくしているのであろうか、少なくとも日本ではあまり盛んではないようである。近年様々な分野で盛んに行われている会話分析から知見が得られつつあるのかもしれない。筆者は Wardhaugh（1985）、Wolfson（1983）などを参考に準備を進めた。

外コミュニケーション」に移していったところで時間となった。宿題として、短い会話（日本語学習者と日本人店員のやり取り）の録音素材を文字化する作業を課した。これを通して、様々な「話し言葉の現実」を感じ取ってもらおうと考えたのである。

第2回の授業では、あえて1回目に省略した「この授業の生まれたきっかけ」について説明し、授業への動機付けとした。宿題（強制としなかったため、5名が提出）をもとに、研修生によってその記載方法、内容がどう異なるか、内容にどのような特徴があるのか、などについて検討した。また外国人とのコミュニケーションにおいては、ネイティブスピーカー同士のそれとは異なる特徴を示すことがあること、会話を進めるために、どんな方略が観察されるかなどを討議した。

2回の授業を終わってみて、非常に駆け足ではあったが、筆者が伝えたいことはある程度伝わったのではないかという感覚はあった。しかし研修生の授業中の反応は決して活発というほどではなかった。それは前年までの「異文化適応」の授業に組み込まれた自己開示のアクティビティがなかったせいかもしれないし、この年の研修生の特徴であったかもしれない。しかしそうしたことを内省したのは、この年の研修が終わった後であったことを告白しなければいけない。

2-5 2004年度「異文化適応」授業

筆者の中では、これまでの『異文化適応』と『オーラルコミュニケーション入門』授業、そしてネットカウンセリングなどは、一連の異文化体験サポート活動であり、別々に切り離されたものではなかった。しかしその一つ一つの役割が微妙に異なるということについて、あるいは新しい授業を受け持つということで、他にどのような影響が出るかということについては、十分に考慮してはいなかった。現実には、『オーラルコミュニケーション入門』授業を第8週に行なったことで、第9週と10週に行った『異文化適応』の授業にも、好ましからざる影響が出たのである。それは第一に、『オーラルコミュニケーション入門』授業の準備の過程で、先行研究探索などに力を注いだせいであろうか、『異文化適応』授業においても、「今年は少し理論についても扱おうか」という「欲」「気負い」が筆者に生じたことだった。前年までの「中途半端に理論を扱うことは、この研修には相応しくない」という大原則を忘れてしまったのである。また前年まで好評であった「本音で語り合う」授業という側面を軽視し、そのための活動を疎かにしてしまったのも事実であった。授業が例年より講義中心となって、研修生中心の授業ではなくなっていた。第二に、前年

まで感じられた「親和的でありながら、集中した」クラスの雰囲気、講義中心にした途端に失われ、「よんどような疲れた」雰囲気が変わっていた。何人かの研修生は授業以外の活動（その週に行われていたマイクロティーチング、次週に控えている教育実習などの準備、あるいは休息）をするようになったのである。それは同じ第9週と第10週に行われた前年にはあまり気にならなかった現象であった。

換言すると、この年の研修生とは、授業時間としての接触時間は増えたのであるが、個対個としての関係は深まらなかったし、いわゆるラポーの形成は得られなかったのである。このことは、少なからず、今後のネットカウンセリングの要請希望やカウンセリング自体の進行に影響を及ぼすのではないかと危惧される。深く反省すべき点である⁹。

3. 今後の授業にむけて

本プログラムにおける「異文化適応」授業とその関連活動は一見すると拡大、定着してきているように見えるが、その実際は上述のように、試行錯誤の繰り返しであり、まだまだ最善の内容には程遠い。また研修生の個人的特質、グループとしての特質が毎年大きく異なるために、毎回「ぶつつけ本番」のような真剣勝負が求められるという事実から考えると、REX 研修が続く限り、この活動の改定も続くということになるが、その方向性をここに示しておきたい。

まず「異文化適応」授業については、研修のもう少し早い時期に実施できないかを検討し、また内容的には、研修生同士、筆者と研修生といった関係の構築の上に、適切な内容を盛り込んだ授業を展開する必要がある。『オーラルコミュニケーション入門』に関しては、研修生には、これから約2年間のフィールドリサーチにでかける社会学や文化人類学の調査者的な視点が必要であるから、その観点からのアクティビティを盛り込むことも考慮したい。またこれらの二つの授業に関しては、毎回研修生から簡単なフィードバックを求めることを試みたい。一方ネットカウンセリングについては、関係機関との連絡が望まれるケース、インターネットだけではなく、電話や直接面接が望ましいケースも出てきており、外部の専門家からのアドバイスを含め、改善を図りたい。

⁹ ただし当該授業に対する研修生のフィードバックは好意的であった。

4. まとめ

本論の意図したところは、単に REX プログラムにおける異文化適応関連授業の内容を紹介することではない。筆者は先に今日の教員が求められている「教員と学習者のインターアクション中心」の授業（特に「日本事情の場合」）について、数々の視点を提起した（宮城 2003）が、ここではその授業を自らがいかに改良していくかを複眼的に試みたつもりである。それは当該授業を担当した教員（筆者）が小規模アクションリサーチとも言える省察的検討を行いながら、授業内容や方法の見直しを行い、別の方向性も思考するという過程を追究したということである。その過程を簡単にまとめると、既存の科目授業の内容改善を図るとともに、別の方策として Pre-service training の中の 2 回の授業では補いきれない部分をネットカウンセリングといういわば In-service supervision へ広げ、そのネットカウンセリングで見えてきた問題を新たな 2 回の授業で扱い、その授業そのものは比較的順調だったものの、今度は元からある授業で支障が生じていくというものであった。

ここ約 10 年、様々な分野で量的研究から質的研究へのシフトが起こっている。いわゆる授業研究においても、質的研究が盛んに行われるようになってきた。しかしそこでは、平山（1997）が詳述しているように、記述された内容が、あるいはそこから導き出された結論が、どれだけ信頼できるものであるかが最大の問題となってくる。その点において、本論は、その研究手法として、研修生のフィードバック（これはその性質上、肯定的評価が得られやすい）という評価を一部で用いているものの、それ以外の点でいくら筆者が客観的な判断、記述を試みても、その説得力に限界があることは明らかである。この点は今後の継続的な研究の積み重ねによってその信頼性を向上させていくことが肝心だろう。また今後は REX 研修自体に外部評価がなされる機会も増え、その中で本授業も評価されていくであろう。さらに筆者がなにより注目していることは、研修修了生が赴任後、あるいは帰国後どんな働きをするかという点からの評価である。この点で研修修了生のフォローアップ（アフターケアと調査）は重要な作業である。

当センターは本プログラムの事前研修を委託されているに過ぎない。しかしプログラムの目的に明らかにされているように、研修修了生は赴任地から帰国後、地元の学校での国際理解教育や外国語教育の中心的役割を果たすことが期待されている。それをしっかりとしたものにするためには、藤森ら（2004）が試みている REX 帰国教員ネットワーク構築のための支援や筆者が実施しているネットカウンセリングも、事前研修を行っている本センターに期待されている活動と考えるべきではない

だろうか。

引用文献

- 井上孝代・鈴木康明 1995 「文部省 REX 計画の事前研修における異文化間臨
床心理学の授業報告」 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』 第
21 号
- 齋藤孝 2001 『子どもに伝えたい<三つの力>』 NHK ブックス
東京外国語大学留学生日本語教育センター 1998-2003 『センター活動記録』
東京外国語大学留学生日本語教育センター日本語教育推進企画部 REX 担当編
2004 『国際理解教育への展望 - REX 帰国教員のネットワーク構築へ向
けて- シンポジウム 2003 報告書』
- ネウストプニー 1982 『外国人とのコミュニケーション』 岩波新書
- 平山満義 1997 『質的研究法による授業研究 - 教育学/教育工学/心理学からの
アプローチ-』 北大路書房
- 宮城 徹 2003 「日本事情を担当する教員に求められるもの」 東京外国語大学
留学生日本語教育センター編 『日本事情テキストバンク ~新たな授業構築
に向けて~』 (CD教材)
- リチャーズ/ロックハート 2000 新里眞男訳 『英語教育のアクション・リサーチ』
研究社出版 (Richards, J.C. & Lockhart C. *Reflective Teaching in Second
Language Classrooms*. Cambridge University Press.)
- 遊佐安一郎 1984 『家族療法入門: システムズ・アプローチの理論と実際』
星和書店
- Beebe, L. M. & Fanselow, J. F. *English in the Cross-Cultural Era*. Tokyo: The
Simul Press, 1987.
- Wardhaugh, R. *How Conversation Works*. Cambridge: Basil Blackwell, 1985.
- Wolfson, N. Rules of speaking. In J. Richards & R. Schmidt, (Eds.), *Language
and Communication*. London: Longman, 1983.

The Process of Reflective Teaching: Development of
“Cross-cultural Adjustment” and “Oral Communication”
Classes and “Internet Counselling” in the Pre-service Training
for REX Program

MIYAGI, Toru

Pre-service training for the REX program has been conducted at the center since 1990 at the request of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, The Ministry of Home Affairs and related local governments. Through this program, approximately twenty Japanese public school teachers have been dispatched each year for about twenty months to various countries such as the USA, Canada, Australia and China, as teachers of Japanese language and culture. The author has taught them subjects named “Cross-cultural Adjustment” since 2002, and “Oral Communication” in 2004, and has also conducted “Internet counselling” since 2003. The first purpose of this article is to study how the three activities have been developed through describing of the process of his reflective teaching and teaching plans. In this process, the lecturer (the author) analysed the trainees’ world view and how he implemented his own views into his classes. The second purpose of this article is to examine his self-evaluation about his classes and to present new directions for future classes and counselling. In conclusion, future direction for the REX program will be proposed.